

■■■ 31-40 ■■■ == => 鳥の話

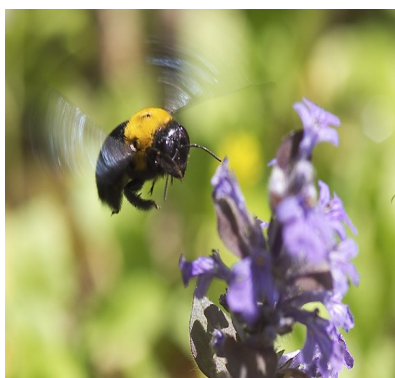
31. 百舌鳥は憎らしかった。屋敷の梅の木に雀が集まって、楽しそうに騒いでいると、どこからかついと翔んで来て、不恰好に尾を動かしている。一瞬雀たちの声が消えて、次々に藪へ遁げこむ。平和の攪乱者という感じだ。

縁先に吊るしてある眼白籠にも、ちょっと油断すると襲いかかる。急いで追い散らしたのに、もう眼のふちを引っ搔かれて血が滲んでいた。瓜子姫を殺した山姥のようで、腹立たしかった。



くちなし

眼白を熊ん蜂に食い殺されたことがあった。坪の内の山梔子の枝に籠を掛けて、



遊びに出た時であった。道で友達に会うと、お主の眼白が熊ん蜂に食われていると告げるのに、驚いて還って見ると、いかにも一匹の熊ん蜂が籠の中で眼白を食っていた。頭のところをほとんど食い切ろうとしている。こっちは百舌鳥とちがって、籠の目から闖入したのである。熊ん蜂の凶悪さは、赤蜂の巣を襲う時、しばしば見て来たが、この時ほど強く感じたことはなかった。

32. 家のみのひき（鶏）が鷹に襲われた時は口惜しかった。後から考えると、その日は四辺がばかに静かで、平常なら何かしらの鳥の音がするのに、さらにそれが聞えなかった。昼過ぎになって鶏が見えぬことに気づいて、呼んで見たがどこか

こうじ

からも出て来ない。そのうち屋敷脇の柑子の木の下に、鷹に食われているのを発見したのだ。最初に気づいたのは母で、鶏を捜しながら柑子の木に近づくと、そこから一羽の巨鳥が飛び立った。長く紐のような物を提げていたが、山際の柿の木に止まったのを見ると鷹であった。その時柑子の木の陰でギャアと一声妙な声がしたそうである。暗い木陰を覗くと、そこにみのひきが潜んでいた。近づくと、それはまさに引き据えられたという形で、背中を食い割かれ、そこから紅く臓腑が見えている。驚いて抱え出して来たものの、どうにも手はつけられない。鶏は押し潰されたようになって、頸を時々上げてギャアと鳴く。早く息の根を止めて遣りたいが、気味悪くてそれも出来ない。仕様がなかったので私が入りの男の家へ走った。男はすぐやって来て抱えて行ったが、家近くの藪の傍らで殺したようであった。

これで一応結末は着いたものの、なお二羽いる雌の行方は知れなかった。程経てから納屋の藁を積んだ中から這い出して来たが、よくよく恐怖に襲われたと見えて、しばらくは気抜けしたようであった。

33. 鶏が鷹に襲われた時は、かならず雄がやられて雌は助かるという。鷹が迫ると、雄は雌を庇護って敢然と立向かい、猛烈に闘うそうである。山口文吉という老人は、ある時闘鶏と鷹の格闘を実見したが、前後三〇分も争ううち、闘鶏の勢いが猛烈なのに、鷹が諦めて逃げ去ったという。もっともそれは小さなまぐそ鷹であったが、そういう例は稀であるという。

34. 鳥と蛇の闘いも、単なる生存競争などとは思われぬ激しいもので、何か宿世の怨敵がめぐり合ったようなところがあった。あるとき近くの発電所の職員たちが遊びに来て、家のものと縁側に腰かけて話していた。陽も大分傾いた時刻であった。鳥が一羽どこからか現れて納屋の前の石垣の端に下りた。そこに一匹の青大将（なまずという）がいたのだ。鳥と蛇とが物凄い戦いを始めた。蛇は鎌首を上げて必死に立ち向かっている。鳥は危険になるとぱっと舞い上がるが、間髪を入れず跳びかかる、見る見るうちに蛇の体が血に染まるのがよく判った。発電所の事務員が、シッと声をかけたが、鳥は遁げるところげない。よほど興奮しているようである。かれこれ二〇分間も激しい争いが続いた後、蛇が全く弱ったと見えた時、鳥は石の上に両脚で立ったと思うと、蛇の首のあたりを啜えてそのまま宙に提げて行った。実に息づまるような闘いであった。

35. 鳥は特に多いというわけではないが、どうかすると一五、六も群れて来る事があった。鳥鳴きがばかに悪いが、誰か死ぬのではなかろうかなどと、村の人はその鳴き声を気にした。事実何か意趣あつてするかのように、不気味な鳴き声をする事があった。静かな山間の天地だけにそれが特に耳に残った。鳥が行水をすると人が死ぬとも言った。小川に四つも五つも重なり合って、行水をやっているのを見たことがある。

鳥を撃ってひどい目に遭ったと、狩人の一人は語っていた。苗代を荒らして困ると頼まれて一羽撃ち殺した。ところが翌日からたくさんの鳥が集まって来て、さかんに鳴き立てて後について廻る。家にはいるとその廻りを離れない。それが幾日も続いたには全く閉口したという。

36. 鳶は多くはいなかった。鼠を捕って表に出しておけば、いつか攫って行った。子供のころ日の暮れ方に、西方の空から次々に飛んで来て、東の空へ渡ってゆ

くのを見た。たしかに鳶かどうかは断定されぬが、鳥ではなかった。一群が過ぎたと思うとまた次の群が続いて、全部では夥しい数であった。老人たちも珍しいことだと語っていた。鳶よりもやや小さいから子供だという説もあった。あるいはヘビ鷹という、一種の渡り鳥であろうともいうた。

37. 鷹は鳥の王だから、撃つと崇りがある。北設楽郡下田村のキンシという酒



屋の主人は、鷹を撃った崇りで死んだともっぱら言うた。しかし鷹を撃ったものがことごとく気が触れたり崇りがあるわけでもなかった。鷹を撃つには、特別の方法があるといって、次のような話があった。鷹は止まる木が定まっています、決して他の木には止まらぬ。それを見極めて、近くに穴を掘って隠れている。木の枝には兎や猿の肉を引っかけておくと、鷹が来てその肉を一口

食うと二口目は提げて行こうとするから、その呼吸を測って撃つ。撃つと同時に、鉄砲を放り出して素早く脱け穴に姿を隠すのだ。鷹は常に雌雄二羽いるもので、一つがやられると、片方がすぐ穴の口に襲いかかるものという。この話にはどうやら弓矢時代の匂いがある、かなり古い話のようである。

38. 鷹の眼球は黄疸の薬というが、別に眼病の妙薬と言い伝えて、どんな難病も立ちどころに治る。これを用いるには、薬罐に水を入れて火に掛け、上から眼球を吊るしておく。湯が沸るにしたがって、眼球から滴が垂れて、中の湯が真黄色に染まるという。

39. 明治三〇年頃のことという。名倉（北設楽郡）の八幡の森の杉へ、ある日の夕方大鳥が来て止まった。それは鳥とも獣ともつかぬ奇怪なものであった。ところが幾日経っても動こうとしない。村のものが怪しんで、鉄砲で撃った。落ちたところを見ると、ひどく年老った鷹であった。但しふしぎなことには、羽の裏側に「鞍馬」の二字が現れていた。おそらく効を経て命数尽きたものだろうとの話であった。

40. 鳥の中では何というても鷹の話が人気があった。鷹の羽倉などもその一つで、いかにもありそうな話題であった。猿の猿酒、山姥のおだまき等と一連の致富

譚があった。鷹の羽倉を発見すれば、夫婦差向いで一代左団扇で暮らせるなどというた。それは深山の岩山の陰しい場所に、雨風のかからぬところにあるもので、鷹はわが身の羽が抜けると、それを大切に蔵しておく。その所在を知った時は、鷹のいない時を測って、積んである下から少しずつ抜き取って来る。こうすればいつまでも尽きる期がない。四〇年ばかり前に、鳳来寺山にあるのを発見したものがあつた。岩と岩の間に美しく積んであるのが遠くから望見されたが、なにぶん高い崖の上で、近づく術がなかったという。また黒倉くろむら（北設楽郡）の小鷹明神の峯にもあるという話があつた。

羽倉に絡んで、次のような説があつた。鷹は己の羽を惜しむあまり、たまたま狩人などに撃たれて、いよいよ最期が迫ると感じると、己が羽を嘴でことごとく抜きとって、折り割いてしまうという。